



ステップスを知り尽くす男である那須は今回、ギャラリーに5体、事務所の本棚に53体、バルコニーに3体と、作品を置くというよりも備えるような展示を行った。素材は銅、鉄、ステンレス、真鍮をそれぞれ組み合わせている。

バルコニーの3体は神経、血脈という毛細を、画廊上部壁面3体は内臓を、中央には足と掌を表している。これらの部分を繋ぎ合わせると、那須光則になるという仕掛けだ。

当然、内臓にリアリティはないが足と掌は那須自身がモデルとなっている。その形と大きさを見れば、那須を知る者にとっては直ぐに理解できる仕組みだ。問題は2点ある。

一つ目は、幾ら足と掌にリアリティがあったとしても、この総合的な彫刻を具象的と見ることは出来ない。それは内臓が空想の産物であることに所以はしない。実際に型を取ったとしても、分解されたパーツに付随するのは那須の想像力だ。具体的に見えても、抽象を形づくる。ここに那須の作品の特徴がある。

那須が抽象作品を作った際に、それは実は具象である場合があることを感じさせる。人間の手や顔、花や山といった具象によく用いられるモチーフを怯むことなく見詰めるといい。すると其処には造型と美しさよりも、何か得体の知れない不気味さが浮き彫りになってくる。翻って抽象と言われる作品に目を投じてみるといい。其処には言葉には出来ない美醜を見出すことが出来る。那須の棚に飾られ

ている小品がいい例だ。ここに盛り込まれている仕草と動作と存在の抽象性を認めることができるのであれば、どうして大型の作品に具象性を喚起させることができよう。目に見えることだけを信じて具象と抽象を発想する観念を破壊しなければ、なるまい。

もう一つの問題は、此处に頭部がないことである。失われた頭部が抽象性を強調する。そうなるのであれば、那須は今後、頭部を造るべき境地に立たされる。頭部を造ることによってより抽象性を強調し、見る者を欺いていかなければ成らない。頭部を造ることによって、その趣旨が損傷する訳ではないだろう。那須は抽象においても具象を造型することが出来る。まさか頭部を造ることに恐れが存在することはあるまい。那須は頭部という自画像と対決することによって、更に作品を深めることになる筈だ。

